

独創的な取り組みを披露

第3回 九州未来アワード



観客約250人が訪れ、ファイナリストのプレゼンテーションに熱心に耳を傾けた
＝8日、熊本市中央区のホテル日航熊本

九州経済をけん引する事業者や、優れた起業アイデアを持つ学生を表彰する第3回九州未来アワード。世界が驚くKYUSHUへ」が11月8日、熊本市中央区のホテル日航熊本で開かれた。1

大賞にライフスタイルアクセント(熊本)

学生起業部門は崇城大学

九州未来アワードは、海外での事業展開や積極的な地域振興に取り組む企業、団体などをたたえることで、新たな起業家や事業者の挑戦意欲を喚起しようと、2015年から開かれている。今回は、企業・団体部門と学生起業アイデア部門でプレゼンテーションが行われた。主催は熊本日日新聞社と九州7新聞社。冒頭で審査員を務める一橋大学イノベーション研究センターの米倉誠一郎教授が「地方創生はイノベーションで」と題して講演した。日本が経済大国になりながらも、自殺率が高い現状を問題提起。学歴重視から学力重視に転換する例を挙げ、やり直しのきく社会にすべきだと強く訴えた。さらに、日本の将来的なマーケット縮小を見据え、国内だけに目を向けるのではなく、成長している国へ飛び出していかうと呼び掛けた。

準大賞には宮川洋蘭(宇城市)



大賞を受賞したライフスタイルアクセントの山田敏夫社長(左)と崇城大学の古賀碧(あおい)さん

学生起業アイデア部門の大賞は、球磨焼酎の製造過程で出るかすを使って光合成細菌を培養した崇城大学生物生命学部の「Ciamo(シアモ)」。処分にかかる費用が、環境問題対策も見込めることなどが、選ばれた理由となった。



次審査を通過した8社の代表と2大学の学生が、それぞれの取り組みや成果を発表。衣料などをネット販売するライフスタイルアクセント(熊本市)が大賞に選ばれるなど、県勢の活躍が光った。

地域や業界を活気づける

審査委員長総評 審査員講評

本大会では各審査員が8社2大学のプレゼンテーションを講評し、審査員長の米倉誠一郎氏が総評を述べた。

■総評
各発表者とも素晴らしい、本当に難しい審査だった。大賞以外にも三つ、賞を設けたが、甲乙つけ難かった。大賞に輝いた要因は、地域の工場を立て直し、若者の働く場をつくるというビジネスモデルが「九州を元気にする」と感じられたからだ。今後も取り組みへのパワーを継続し、輪を広げていただきたい。熱い思いが伝わる最高の大会だった。

熱い思い伝わる最高の大会

【崇城大学】本来捨てられる物を資源として活用している。地球上に優しい「社会性」のある素晴らしいプランだった。



焼酎かすで培養した光合成細菌の商品化を提案する崇城大学Ciamoのチームリーダー・古賀碧さん

崇城大学 Ciamo (熊本市)

大賞

学生起業アイデア部門

焼酎かすで光合成細菌

農業の有機肥料や水産物の水質管理に用いられる光合成細菌を、焼酎かすで培養することに成功した。光合成細菌は農水産業で使うには高価だが、通常廃棄される焼酎かすを活用すれば原価を抑えられる。蔵元にとっても廃棄コスト削減に役立つ。チームリーダーの古賀碧さん(22)は球磨郡あさぎり町出身で、幼いころから蔵元を見て育った。大学で微生物を研究しながら、農水産業、蔵元双方の発展に寄与したいと発案した。

今後は、エビ養殖用の細菌培養キットの商品化を目指す。ターゲットは、エビの輸入先であるインドネシアやパトナムなどの東南アジア。キット購入後は培養土だけを買い足すだけで、モニタリングコストに配慮し、現地水産業者の負担を軽減する方針だ。

古賀碧さんの話
一緒に取り組むチームメイト、協力してくれた仲間、いい報告ができた。このアイデアは私の夢。実現に向けて一歩、前へ進むことができました。